

第三五回研究発表会発表要旨

『雨月物語』 「浅茅が宿」 における宮木像

古 館 亜佳里

上田秋成の読本『雨月物語』 「浅茅が宿」を、女主人公宮木像を軸として読み解いていきたい。秋成が何を意図して宮木像の造型を行ったのか探るために、まず、典拠の一つである『剪灯新話』愛卿伝と「浅茅が宿」を比較したところ、再会から共寝へと至る展開において、「浅茅が宿」では作者の意図的な改変が見受けられ、場面の

順番の入れ替えが行われていることが明らかになった。「浅茅が宿」には「装う男女」という構造が窺われるのである。また、「生長て物にかかはらぬ性」と設定される勝四郎は、宮木との再会時、必死に自分の不誠実さを取り繕おうとしているように思われる。一方、宮木は、「逢を待間に恋ひ死なば、人しらぬ恨みなるべし」と述べており、男を恨む気持ちを隠して勝四郎に応じているように思われる。先に述べた「装う男女」という構造は、より詳しく見れば、「誠実を装う男」と「貞淑を装う女」という構造であったと言える。

次に、貞女の伝説である「手兒女伝説」が用いられていることに注目する。「浅茅が宿」後半部において漆間の翁は宮木を哀れむが、それは、宮木を手兒女と重ね合わせてのことと推測される。漆間の

翁の語りによって、宮木は貞女としての像を獲得すると言えるが、しかし、言葉の裏に恨みを隠して男に対応する宮木を、本来、貞女とは解し難いはずであり、ここに、作者の裏の意図が窺われて来よう。秋成は、翁に手兒女伝説を語らせることにより、宮木の「貞女の装い」を強めていると思われる。翁の台詞により、宮木像が変化し、美化されており、翁は宮木の死後、彼女の名誉を守る存在として描かれていると思われるのである。一方、勝四郎は宮木の死を悼み、一首の歌を詠む。しかし、そこに宮木に対しての謝罪や反省の言葉はなく、ともすれば、宮木を亡くした自分を悲しんで詠んだ歌のようにも思われる。勝四郎は最後まで宮木の晴れぬ恨みに気付くことはなく、伝説上の貞女・手兒女と宮木を重ね合わせて悲しんでいるに過ぎない。

秋成は、「浅茅が宿」において、取立て、女性・男性それぞれの性を描いているが、物語中に出てくる「性」は全ての人間に当てはまると思われる。秋成は人間の性を、そして、その性を持つが故に狂気をはらみ、常軌を逸していく過程の姿を描きたかったのではないだろうか。

(ふるたち・あかり)